

III パネル討論

話題提供3 久米島から

NPO法人 ガイア・イニシアティブ代表

野 中 ともよ



私へのお題は「久米島」ですが、まず、今日のテーマの確認から。石田先生、ごめんなさい。つい、いつもの癖で、俯瞰しながら、全体のまとめをしつつ進行するMC病ですね(笑)。全体のテーマは「琉球の島々から日本の行く末を見据える」ですが、そもそも何故、沖縄の島々なのか?で、次には、見えてくるのは何なのか?です。

まず、基調講演の八幡さんからは、水の惑星と呼ばれる地球という星の表面7割以上を覆う「海洋」の持つ意味を「空間軸」でお話をいただきました。しかも、実際に、大海原に肉体そのものを投入して、たった一人の「いのち」がどんな経験なさったか。とても貴重で稀なお話でした。次に、二つの島からは、まず「時間軸」としての山極先生。宮古島の上でも、何万年というスケールで、それぞれの島にはどのような人々が、どうやってバトンを受け渡して「今」があるのか、という掘り方と実像を教えていただきました。続く与論島からのシェアは、「民俗学的アプローチ」で、島という閉鎖空間の中での暮らしに傾注。

しかもコロナ禍という現代の問題に人々がどう対処しているのか、という現代のことも含めて、人々の暮らしで島を切り取ってお話をしてくださいました。

私はアカデミアの専門家でも研究者でも冒険家でもなく、自然大好き、海大好き、沖縄大好きな性格もあって、久米島生まれでもない東京生まれの東京育ちですが、いのちを産む母親として。経営者的視点として。また、宇宙の中で、ぽかんと浮かぶ離島としての地球の中の離島の日本、その未来を指向するに、さらに小さな離島としての久米島で何が可能か。これまでにいただいた久米島とのご縁をもとに、お話をさせていただこうと思います。

実は、コロナ前に、是非次のシンポジウムは沖縄で開催できたら良いですね、というお話を田中先生とさせていただいたのは事実ですが、このようにたくさんの方々からのサポートや、ご参加をいただける形になるとは、本当に夢のようでもあります。ありがとうございます。

冒頭に申し上げましたように、私自身は、

「沖縄が変われば、日本の未来は拓ける」と強く信じているものです。逆を言えば、「沖縄が変わらなければ、日本に未来は拓けない」とまでも思っています、大袈裟でも何でもなく。何故か。島国日本の中で、かつては万国津梁の地政学の下の文化が根付き、異文化統治も経験。多国へ移り、築いて来た血縁者の移民文化を自身に繋げて投影できる世界観もあり…。そして、豊かな「自然（じねん）」の懷がいまだに残っているという恵まれた環境もある。「ぬちどう宝」（いのちこそが宝もの=生きていることこそが大切なこと）という庶民の価値軸があること、などなど。まだまだたくさんの背景が見えてきます。

先ほどの紹介にもありました、私ごとで恐縮ですが、NHKでのキャスターや、アサヒビールの取締役や、日興証券のシンクタンクの理事長で金融のことをやってしたり、あるいは電気屋さんですが三洋電機の社外取締役から会長をやってなど、他にもいろいろなことを、実業の世界でも経験してきましたが、GDPのお話が出てきましたが、金融も経済も、ビジネスの現場でのお金はもちろんとても大事です。でも、コロナ禍で、ガーンと社会全体が頭を叩かれましたが、どんなにお金持ちでも地位があっても、罹れば死する危険がそこここに漂っている、という状況。人生の中で「いのち」こそが、本当は一番大切な価値あるものなのだ、というあまりに「あたりまえ」すぎる事実を確認させられたのだと思うのです。

人間は時代を跨いでも、いつも領土や資源やお金…、表現対象は変化しても、他者より

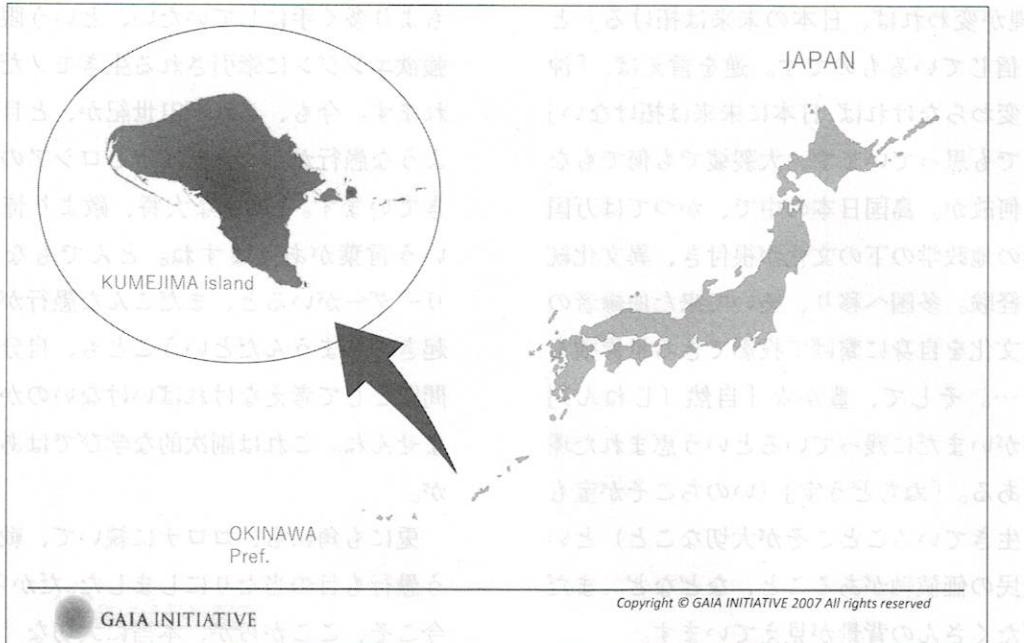
もより多く手にしていたい、という限りない強欲エンジンに牽引される生きモノだと言われます。今も、これが21世紀か、と目を疑うような愚行が、ウクライナとロシアの間で起きています。「馬鹿な大将、敵より怖い」という言葉がありますね。とんでもなく変なリーダーがいると、まだこんな愚行が実際に起きてしまうんだということも、自分たちの問題として考えなければいけないのかもしれませんね。これは副次的な学びではあります

が。兎にも角にも、コロナに続いて、戦争という愚行も目の当たりにしました。だからこそ、今こそ、ここからが、本当に大切な「変革の時」だと思っています。「ピンチこそチャンス」。沖縄の可能性は、ピンチの中にたくさん潜んでいると、信じています。

それでは「久米島から」大事な日本の行く先が見えてくる、という視座を皆さんとシェアさせていただきたいと思います。

まず、久米島は那覇から100キロぐらい（スライド1）。飛行機で30分、フェリーに乗ると3時間半から4時間ぐらいかかります。日本で一番西側、中国大陸に近い位置だという表現をしてくださる方もいます。人口は、私がご縁をいただいた頃は1万人弱でした。

でも、今年は7000人台です。1年に100人以上の人口減少がものすごく顕著に表れている島です。見てください、この美しい「はての浜（スライド2、3）」コマーシャルでも撮影でもよく使われるところではあるんで



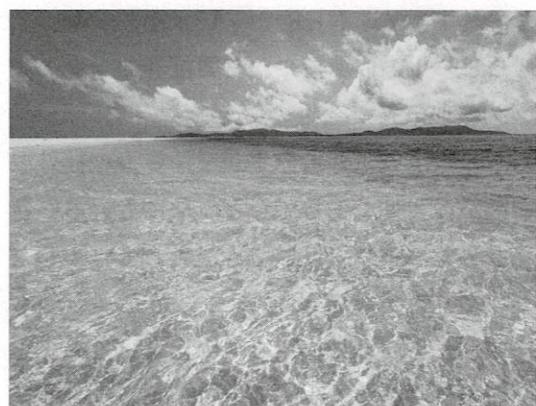
スライド1



スライド2

すけれども、これは、いくらお金を積んでも作れません。そう、つまり、一度壊してしまったら、二度と元には戻らない、それが自然（じねん）がくれた宝物のあかしです。

久米島との縁は、遙かに10年は超えています。三洋電機の会長を辞めた頃、日本太陽光発電協会長というのもやっていたんですが、日本は、再生可能エネルギーで食べてい



スライド3

けるような国にしないと大変だ、という危機感がありました。私たちの毎日の生活はほとんど全て電気に頼っている。電気無しには、生活はできないくらい。でも、その電気をおこすための材料の100%近くを、日本はお財布からお金を出して外国から買っているのです。だから二酸化炭素も出さないし原発が必要だ、という方もいますが、いえいえ、原発

に必要なウランも同じことで、外からの調達。それどころか、使用後の処理方法も定まらないし、一度事故が起きれば、原子爆弾と同じ機能を果たしてしまうほどの、凶暴な破壊力を兼ね備えた代物です。二酸化炭素どころの騒ぎではありません。

流行りだから、再生エネルギーだ、ではないのです。エネルギー自給率を高め、例えホルムズ海峡封鎖があっても大丈夫。ロシアにガス売ってあげないよ、と言われてもOK。外国頼みから一刻も速く脱却し、平時の国民生活を続けることができる国になること、これは、防衛費拡大より何より大事な施策だと思います。

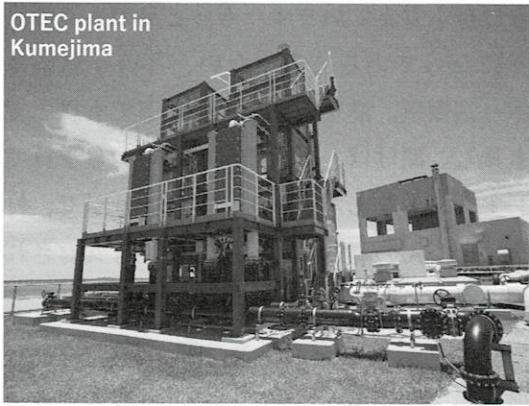
そう、エネルギーの自律をいかに進めるか…こんな思いを常に抱えていた野中が、丁度NPOのガイアイニシアティブを立ち上げた頃に出合ったのが、久米島でした。そこにはOTEC（海洋温度差発電）という設備が、そのときは世界でここだけで稼働していたんです。実証実験程度でしたけれど。

実はハワイ大学のEast-Westセンターという研究所にいたことがあるんですけれど、そこで、ハワイ島に世界初のOTEC装置がある、というのを知り実際に見学にも行ったことがありました。かつて大田さんが沖縄県知事でいらした頃これを見て、沖縄にも、これが絶対必要だというので、出身地の久米島につくらせたという話も伺いました。これが、そもそももの始まりと言えるかもしれません。平成天皇皇后両陛下のご訪問を受けたことがある、と聞いて驚きましたが、初めて久米島を訪ねて見学させていただいた時の、少しの驚

きは今も覚えています。もっと島の人々の誇りになっているに違いない、という思いは木つ端微塵。淋しい施設、の以下でも以上でも無し。聞けば、革新知事の思いつき予算でしょ、なんなんだかね～、のイメージで、村民にはなんの有り難さも、有用性も共有されていない、ということでした。

きゃ～！です。なんともないなあとか。海洋温度差発電。ざっくり言えば、海面のあつたかい水と、深さ600メートルあたりから汲み上げた冷たい深層水の温度の差を利用して、沸点の低い溶液を海面の海水の中を通るパイプに通せば、即、蒸気に。で、その蒸気を、再び冷たい深層水の中のパイプに通せば、あら不思議。また、溶液に戻る、という仕組みで、これはグルグルずっと循環します。そう、仕組みは原発と全く同じ。原発も沸騰水型は、なんのことない、100度でお水を沸騰させ、蒸気でタービンまわして発電しているのですからね。海面海水の熱で蒸気ができれば、何千度もの核分裂などいらないのです。それでタービン回して電気を起こせる、というわけです。漸く注目を集めようになった昨今では、少しペイントなどお化粧直しもあり、ちょっと綺麗になりましたが、この可愛らしい装置です（スライド4）。

課題は、深層水を汲み上げる装置が高いこと。と言っても、その深層水の無菌ぶりや、栄養価などのメリットに着眼して、海ぶどうや車海老、牡蠣の養殖をはじめ、化粧品やサプリなどの産業開発を並行して進めれば、高付加価値の独自產品生産など、辺縁系で経済循環も十分に可能だと思います。



OTEC plant in
Kumejima

スライド4

沖縄の海全体が沖電に見えていませんか？ちょっと気持ち悪いですけれど。笑。つまり、これが、何度も再生し、グルグル持続することが可能なエネルギー源なのです。人間の知恵もここまで来ています。暖かい島嶼地域にぴったりだと思いませんか。

では何故、こんな放ったらかしに近い状況が続いたのか。

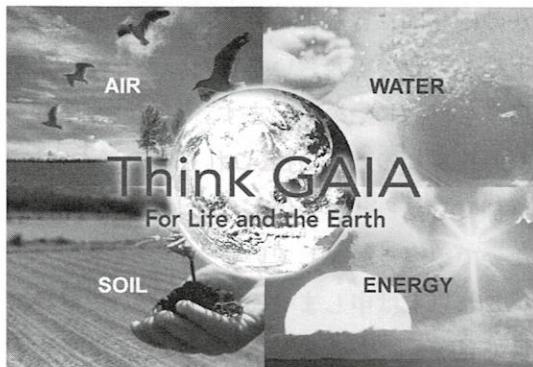
エネルギーの問題は、常に要注意。やろうとすると、やらない方がいいよ、殺されちゃうよ…。必ず、このまるで映画のようなセリフが登場するのです。

ガソリンも要らないね、という水素自動車。野中は三洋電機時代もすでにやっていたんですけども、燃料電池自動車といって、水素と酸素の化学反応で電気を起こし、モーターを動かすタイプもあれば、まるで植木鉢に水をやるごとく、自動車に水を入れる。水素と酸素に分解し、その水素と酸素を再び合体させると出てくるのは水蒸気。それで走る。ガソリン車と同じようにピストンを動かせば、エンジンは動くわけです。こうしたテクノロジーは、日本では1960年代にもう公道を走る

ところまでできていました。東京のある大学で、この研究を続けてきた教授は、当時、バスのサイズの大きな自動車で動いたんだがね…と、実際のメカニズムも見せていただきました。でも、オイルや化石燃料がらみの技術は、それがいらなくなるようなものであると、どこかで不幸なことが起きてくる。こういう、環境や、人々のいのちにとっていいことをしようとしていると、その当人のいのちが危うくなる…みたいなことが実際に起きている。今日はメインのテーマではないので先に進みますが、私自身の経験もあり、あながち都市伝説、とばかりは言えない世の中です。

加えて、安い値段で手に入る従来電気があるんだから、そんな研究はやっても無駄でしょう？という意見でストップせざるを得ない状況に追いやられることも多いのです。

先ほどちらっとお話ししたんですが、三洋電機の会長になったときに会社のヴィジョンをつくりました。人間が生きていくためには空気と水と、そして食べ物をつくってくれる土壌と太陽エネルギー（スライド5）の四つがなければダメ。なのに、現実の私たちは、どれについても問題を抱えている。ならば、その解決のために立ち上がる電機メーカーになろうじゃないか。4要素の全ては地球という惑星が、私たちの「いのち」を育むために用意してくれてある要素。現存する課題解決には、デモより技術が必要だ、ということでお『Think GAIA』としました。GAIAというのは、地球が、あたかも一人の人間の身体のように、恒常性（ホメオスタシス）があるんだ



スライド5

よという立証された科学理論でもって、地球を呼ぶ呼び方です。つまり、私たち三洋電機は、これから、電気屋さんではあるけれど、生きているのではなくて生かされているという人間として、私たちのいのちを育んでくれる地球環境の問題を解決するための仕事をしていこう、という目標です。NHKが空気を出してくれているわけではありませんものね。そう、酸素ならば、木々の葉っぱが与えてくれている。しかも私たち人類のため息の二酸化炭素を吸い込み、炭水化物の食べ物まで作ってくれながら、です。空気問題では、当時「鳥インフル」が初めて現れた時。R&D（研究開発グループ）は、早速ヴィールスを99.9%除去できる空気清浄機を開発してくれました。北里大学やパストール研究所で検証もしてもらい、スイスのWHOへのサポートにも駆けつけました。同様に、水を使わない洗濯機とか、太陽光からも充電でき、しかも、買ってすぐ使える電池。1000回も、今では2000回でも充電して繰り返し使えるエネループという電池も開発してくれました。人間は、明確なミッションを持てば、絶対可

能になるまでやり続ける力があるのですね、現場の研究開発や技術陣の素晴らしい力を教えてもらいました。

さあ、そんな野中が久米島のことを知ったからには、駆けつけないと気が済みません。

「え？ 野中さん？ NHKで見ていた本物の野中さんかい？」

「はい、本物です、笑」これが当時の平良村長と初めて交わした言葉でした。で、至極意気投合。島中行脚の楽しき出逢いがスタートし、NPOの「+1」（プラスワン）プロジェクトのパートナーシップ協定と相成った、という訳です（スライド6）。

一日一つ、一人一つ。地球の未来のために、あるいは、地域や仲間のために、何かいいことを積み重ねてみよう、という「+1」プロジェクト。でも、島中を歩くうち、暮らすうち、この島の持つ様々な魅力、可能性にどんどん引き込まれていきました。久米島においては、この島の持つ可能性を発掘し磨くことで、「水、空気、土壤（食）、エネルギー」この、いのちにとってかけがえのない4要素を

+1 「いのち輝く島」 プロジェクト



スライド6

自ら満たす、地産地消で自産自消も兼ね備えた、地球の、そして日本の新しい暮らし方のモデル的地域になる！そう確信してしまったのです。で、「いのち」の価値軸で地域づくりを組み立ててみよう、という独自のミッションを志として立てました。

本当に凄い島なんです。逐一ご説明はしませんが、例えば、ラムサール条約。大海の離島ですよ。そこに実に清らかな、ラムサール条約に認定された清流がある。しかも100%、エネルギーミックスさえ考えれば自律できる、海洋深層水がすでにある。

水に続く土壌はどうか、というと、これも、なんと、沖縄県各地で異なる固有の土壌の全てが、この久米島に集まっている、というのです。それも久米島だけのこととか。驚きました。食糧を支えてくれる土壌の豊かさは、フードセキュリティーの基本にもなります。

しかも久しい米の島の、久米島。米作りは、かつてはバリ島のような美しい棚田があちこちにあったんだそうです。それが全部サトウキビ畑に政策的に変えられて來た。島津時代までいかなくても、先の大戦まで遡れば、サトウキビさえつくればどんな出来の悪いものでも、その収穫量の重さで買ってくれて、キャッシュになる、とのこと。サトウキビづくりへの政策的シフトは、農薬や肥料過多など含め土壌の疲弊や、赤土流出など負のインパクトも同時に島にもたらしたようですが、昨今の政府の買い取り制度も激変する中で、新たな食糧自給ゴールに向けては、ガラリとシフトする良い機会に思えてきました。稲作の歴史はまだ充分に人々の中にもあるし、さ

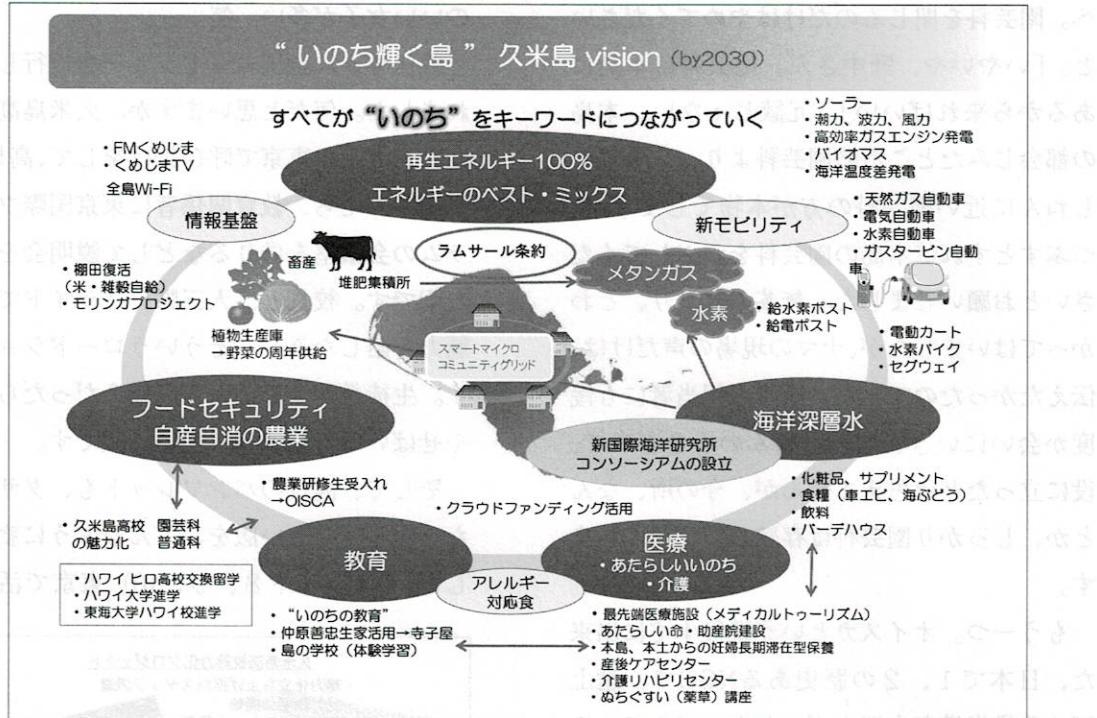
かのほればできるよということで、あちこち土地も見せてくださいました。固有種の久米島蛍も復活し始めています。二条城もびっくりの枝ぶりの五枝の松、これも島の真ん中に、京都でも見られないほどの立派な枝を伸ばした姿で鎮座ましましています。

これ以上は申しません。どうぞ、ご自身の目で見てくださる楽しみにとっておきましょう。笑。

さあ、ここから、「いのち輝く島」のモデル化を整理し始めました。これがその図です。(スライド7)

大規模な設備が必要な温度差発電などのエネルギー関連や、情報系のフリー wifiなどは、大きな予算や投資が無ければ始まりません。貧乏NPOには手も足も出ません。そう、この時点では私たちはコンサルタント業でもなんでもない訳で、ただ、島に、そして島の人々に惚れ込んでしまっただけ。私たちが自ら動けば、変えられることは何かあるか？とばかりに、頼まれもしないのに、とにかく可能性が見えてしまったのだから前に進んでみよう、私たち自身の学びでもあるのだから、という具合でした。

で、まず、教育から手をつけ始めました。多くの離島の決定的な課題は、高等教育機会の欠落です。義務教育の小中学校はある。でも、高校進学のために、若者が島を離れなければならないケースがほとんど。これが、人口減少に一番ヒットしてしまうのです。でも、本当に幸いなことに、久米島には、高等学校がありました。しかも園芸科がある。



スライド7

普通科と園芸科があるんです。ここに、アレルギー対応食、とあります (スライド7)。何かというと、私たちがご縁をいただく以前から、すでに民宿のおかみさんに至るまで、町の役場が、当時は村でしたけれども、アレルギーの子どもがいる観光客が来たら、こういうメニューをしましょうねというのを、行政が音頭を取ってメニューをつくっていたのです。「食」への心配りもあったわけで、とりもなおさず、これは、農業への視座にも通じてくる。そうした中での園芸科の役割は大きいのです。これからは、島において、オーガニックであること、野菜も果物も、これが当たり前になり、しかも、高付加価値商品として高く売買されるものになることをしっかりと学べるわけです。因みに韓国では、義務教育

レベルの学校給食は、全国すべて、その地方のオーガニック野菜でなければダメという法律までできています。種をめぐる法規制など含め、より良い未来創りに、園芸科の果たす役割はどんどん重くなると考えていた矢先です。

子どもたちの多くは本島の高等学校を目指す傾向があるし、人口減の中、もう園芸科は閉校にしようと思っていますという話が聞こえてきたのです、そのとき。10年前。それこそ、オイオイ、です。

以前に、内閣府の沖縄振興審議委員などというのも10年近くやっていて、当時の仲井真知事とはお隣が長く（野中の「の」と、仲井真の「な」）、よく存じ上げていたので、久米島からの帰りの便で那覇に寄って、知事室

へ。園芸科を閉じるのだけはやめてくださいと。「いやいや、野中さん。園芸科は本島にあるから来ればいい」。冗談じゃない。本島の都会じみたところの園芸科より、久米島のじねんに近い園芸科の方が本物でしょうが。つぶすとすれば本島の園芸科をつぶしてくださいとお願いしました。無茶ぶりブリ、とわかつてはいましたが、ナマの現場の声だけは、伝えたかったのでした。県庁の担当者にも幾度か会いにいきました。ほんの小さき声で、役に立ったとは思えませんが、今の所、なんとか、しっかり園芸科は存続してくれています。

もう一つ。オイスカという戦後すぐに出来た、日本で1、2の歴史あるNGOで、途上国の農業指導者支援をずっとやってきている団体があります。その国際部の部長をやっていたのが、私たちのガイアのメンバーでもあったのですが、彼女いわく、日本の未来や行く末は不安だらけ。とりわけ日本の農業が今や酷い状況になっていて、とても、後進国と呼ばれる人たちに教えるどころじゃないです、と。構造的金属疲弊と読んでも良いほどの状態はなんとか手を打たないと大変なことになる…いつもこんな話をしてくれている彼女に、「いのち輝く島」久米島の件を相談していたら、ですよ。独身であったこともあると思います。「私、行きます」と言って、その職を辞して、久米島の教育委員会に飛び込んで移住してくれたのです。東大大学院卒、TOEIC満点のおっとり女子。やはり、いいですね、女子は。決断する度胸や覚悟がキッパリしている。とりわけ私の周りには、気持ち

のいい女子が多い。笑。

就任早々に全国ロードショーを敢行してくれました。何だと思いますか。久米島高校の魅力を大阪や東京で呼び掛けをして、高校生、親御さんたち、教育関係者に東京国際フォーラムの会議室を借りるなどして説明会を開いた訳です。校長と二人三脚。スライドで島の魅力を話したり…。そういうロードショーです。生徒数が少ないので閉鎖？だったら、増やせばいいでしょう、という訳です。

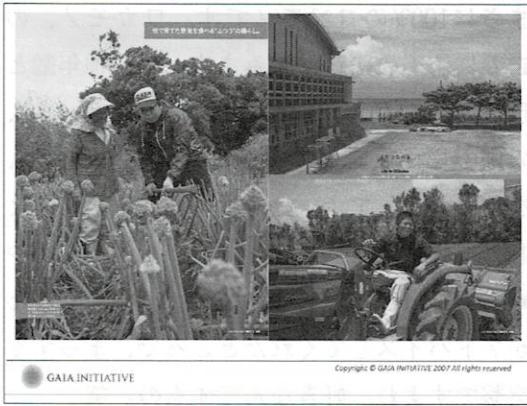
そして、高校のパンフレットも、ダサいったらありやしない版を、こんなふうに変えました。(スライド8、9、10) 東京で活躍し



スライド8



スライド9



Copyright © GAIA INITIATIVE 2007 All rights reserved

スライド10

ていたプロのカメラマンに、おいしいお刺し身をご馳走しまーす、海も綺麗でーす…でお願いして。笑。この三線を弾いているのが校長先生です。三線を持って柔かに微笑む校長が、東京で説明会をやってくれるわけです。彼女は、また、島中の1軒1軒を訪問しながら

らホストファミリーを見つけだし、海外から（はい、海の外からですので、海外。笑）海外留学生を受け入れることができるようになったのです（スライド11）。受け入れ家庭を見つけることが、いかに大変か。これもわかり、これは町に頼んで、いまや寄宿舎が完成、その寄宿舎では「地域おこし協力隊」を募って、若き先生陣による町営塾も開かれています。

都会で何だかしおれた野菜みたいになっちゃっていた高校生がここへ来て、さらに医学部に合格、なんていうケースも生まれ、親御さんも大いに喜んでくれています。真っ黒に日焼けして、勉強して、トラクターの運転も習って…。そんな素晴らしい若者たちが出来上がっています。

志望校は、南の島にありました。

Copyright © GAIA INITIATIVE 2007 All rights reserved

スライド11

電気がOTECでいつも確保できる。そして、島中フリー WiFiの設備を持つ。そうすれば、世界といつでも繋がれる。高等教育だって、ハーバードだろうが、ケンブリッジだろうが、今やネット上で、タダで授業が受けられるのですから。それこそ、じねんの環境が素晴らしい久米島で、健康な生活を送りながら、国籍超える海外留学なんかしないでも良い時代が来ている、ということです。

「No problem can be solved by the same level of consciousness which created it」。(スライド12)。これはaignシュタインの言葉です。つまり、問題が起きたのと同じような意識レベルでは、その問題は解決することはできないよ、というわけです。

人は往々にして、その環境の中にいると、その環境の中で起きた問題や課題について視点を変えて捉えてみる、ということが出来にくいものです。だから、どんなことでも変革や改革の時に力を發揮するには「よそ者、若者、バカ者」の力だ、と言われる所以ですね。なるほど、その通り！と自身を実感します。

**“No problem can be solved
by the same level of
consciousness
which created it.”**

-Albert Einstein

GAIA INITIATIVE

Copyright © GAIA INITIATIVE 2007 All rights reserved

スライド12

まさに100%のヨソモノです。ワカモノ、の定義に若干の躊躇が滲みますが、精神年齢と理解していただければ、bingo。バカモノ、の定義には東京弁ではなく、関西弁のアホ、を使いたい。アホ、は、熱く惚れるの略語として。つまり、熱く惚れてるから、人が「やめといたほうがいいよ」とか「ヤバイよ」とかアドバイスしてくれたところで、まっすぐ突撃ですよね。好きなんですもの。笑。

先程、八幡さんが「好きだから。楽しいから」が大事、と仰ってくださいました。本当に久米島に熱くほれてしましましたのですね。

「野中さん、それはやめた方がいいよ」と言われても、アホですから、できることはやらなきゃ嘘でしょう、と。悶々として行動しないところからは、あまりいいアルゴリズムは見えてこない。という訳で、そうこうしているうちに、第2号の移住者登場となります。

私の大変信頼しているNPOのスタッフですが、子どもを連れて島に移住（スライド13）を決めてくれました。次のチャレンジは何になったかというと、「10年後、あなたは



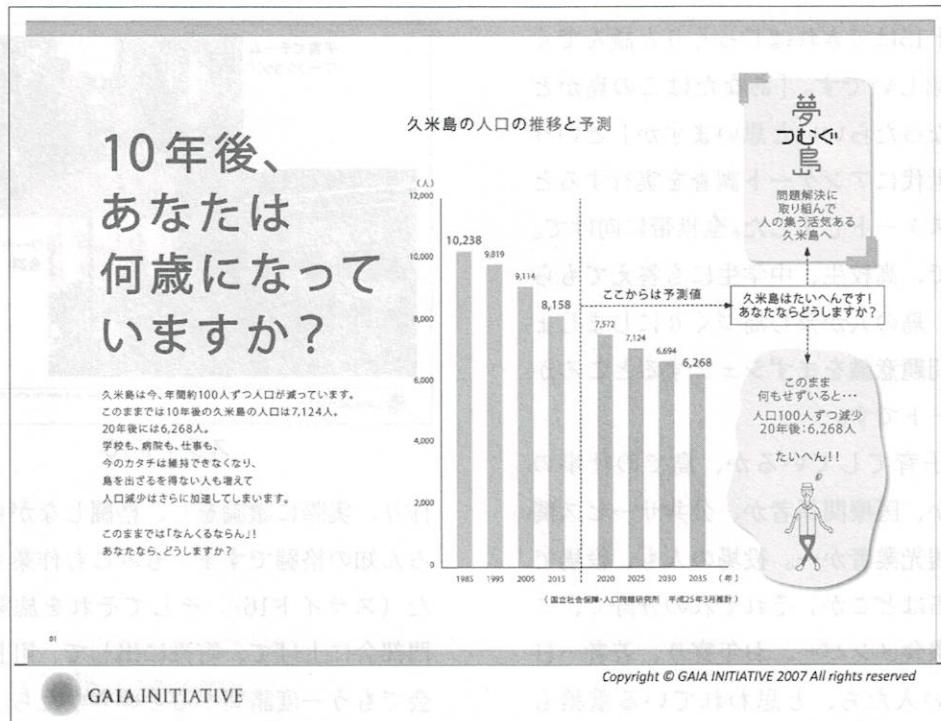
スライド13

何歳になっていますか?」この質問。「あなたは10年後どんな島に生きていたいですか?」(スライド14)。

これは実は、久米島の10年先の総合計画をつくらなきゃいけないんだけどという役場からのミッションが、その翌年に下りてきたんです。それでは、というので、私たちはコンサルタントでも、何の、そうやって稼いできたことも経験もありませんでしたが、でも、改革に必要な「よそ者、わか者、何とか者」です。アホぶり發揮で、もちろん入札制度を経てゲット。さあ、何をしたか。そう、まず移住し、本腰生活者となってみた訳です。

島の改革計画なんてコンサル会社が、北海道の島でやった報告書の表紙の島の名前を消しゴムで消して書き直し、ちょいと数字を書

き直しただけ。実際、地方の地域おこし予算は、実効性なき企画書作成だけに消費されていく…。そんなものが多くあるよ、とはよく聞いていました。だから、そうでないものを作ろう。島人(しまんちゅ)島に住む人々が、本気になってこの島を変えようと思わない限り、何も変わりはしないというのが私の実感でもあったので、計画書作成をゴールにする、というよりも、そのゴールに向けてのプロセスそのものもって、島の、島の人々による、島の未来創りステップを構築しシェアできるようにしたい。生活者の目線、その視座から課題をしっかり認識して、どうしたいのか? どうすればできるのか? また、どうはしたくないのか? …一人ひとりの自分ゴトの総体としての総合計画を作ろう、と決めた訳です。



スライド14

久米島町第2次総合計画 住民アンケート
～島の未来を考えるということ～

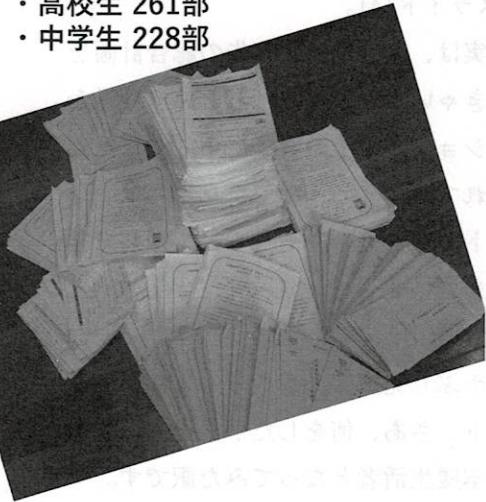
アンケートと聞いて「正直、面倒だな・・・」と思った方！
あなたは10年後、何歳になっていますか？
その時、あなたと、あなたの家族はどんな暮らしをしているでしょう？
遠い未来のようでいて、10年後は健やかに、そして意外とすぐにやってきます。
「こんな事らしができていたらいいな！」
皆さんとの思いを集め、島の未来づくりにつなげていく。
それが町の10ヵ年計画である「総合計画」です。

今、久米島町では年間1000人ずつ人口が減っています。
このまま人口が減り続けると何が起きるでしょう？
今、全国の過疎化した町からは病院も老人介護施設も消えています。
子どもが怪我や病気をした時にすぐに施設をしてもらうことができなくなる。
ずっと暮らし続けてきたこの島で、長期を考えることさえ難しくなります。
子どもや若者の数が減れば、町の活動や労働力が失われていきます。
活気のない場所には人もお金も集まらない。飛行機の便数だって減るでしょう。
つまり「別に、このままの暮らしができればいいよ」と思っていたとしても
何もしなければ「このまま」を続けていくことは難しい。

だから、働くのは、今。
日頃思っている「こうなったらいいな！」を集めて
10年後の島づくりを始めましょう！
まず、その基盤となる
この住民アンケートへの参加がスタートです。
ぜひ、日頃思っていること
実現したことをお寄せください。

Copyright © GAIA INITIATIVE 2007 All rights reserved

住民アンケート配布

- ・全世帯 3915部
 - ・高校生 261部
 - ・中学生 228部
- 

久米島町第2次総合計画 住民アンケート

GAIA INITIATIVE

1

スライド15

スライド15はできればじっくりと読んでくださいと嬉しいです。「あなたはこの島がどんな島になったらいいと思いますか」というのを、全世代にアンケート調査を実行するところからスタートしました。全世帯に向けて。学校経由で、高校生、中学生にも答えてもらいました。島の人人が望む島づくりにしましょうという問題意識をまずシェアするところからのスタートです。

自分が子育てしているか、島での仕事の真っ只中か、医療関係者か、公共サービス関係者か、観光業者か…。役場の人も、役場で自分の担当はどこか。それぞれの分野で、ここには審議会メンバー、お年寄り、若者…日頃うるさい人たち、と思われている重鎮も入ってくださいって、笑、ワーキングチームを

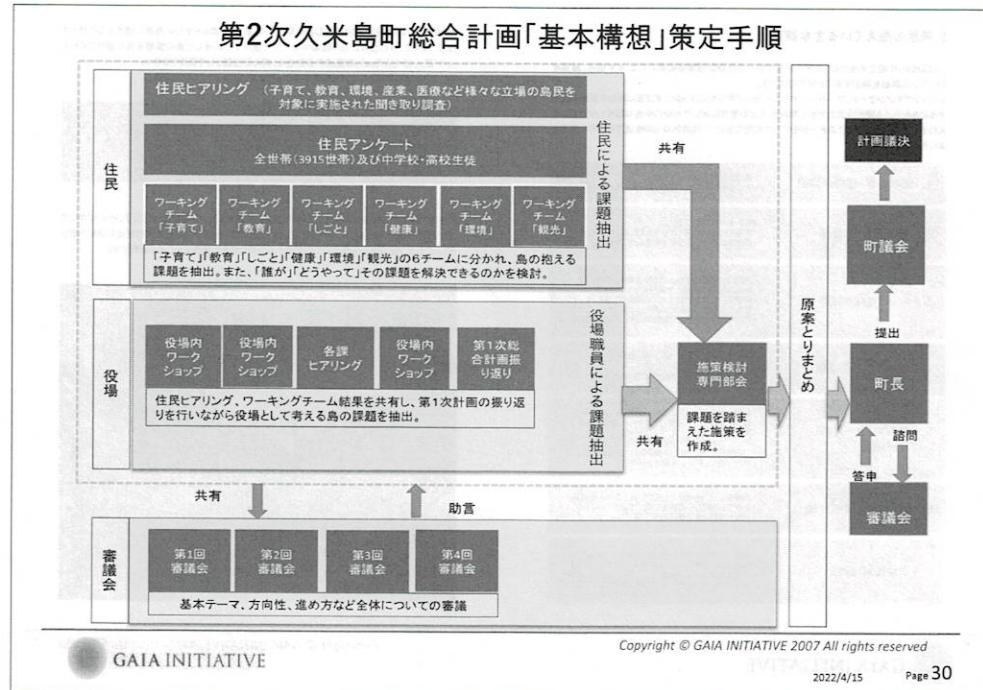


Copyright © GAIA INITIATIVE 2007 All rights reserved

2007/4/75 Page 16

スライド16

作り、実際に議論をし、格闘しながら（もちろん知の格闘です！）もみこむ作業もしました（スライド16）。そしてそれを施策検討専門部会に上げて、町長に提出して、町長が審議会でもう一度諮詢するというかたち。それを議会にかけて採択してもらう。そんなプロセ



スライド17

スを歩みました（スライド17）。

スライドの18の緑。人が生きてから死するまでのライフステージを7つに分けて課題を整理し、それぞれのワーキングチームごとに討議を重ねました。スライドの19を見てください。課題が山盛りでてきました。「文句ではなく「課題」と認識して整理してみれば、あとは、じゃあ、どっから手をつけて、どうしようか。もはや前向きの方法論へとエネルギーを出せる訳です。で、スライド20と21。落ち着いて見回してみれば、結構イケてる島ってことが見えてくる。

どこにも責任者がいっぱいです。町長の責任だけではないし、書いたNPOの仕事だけでもない。みんな自分ごととして関わるというプロセスを明確にすることが、総合計画をつくる一番大事なポイントだと。どんな立派

なものができるより、このプロセスこそが、まつりごと、つまり、政治とは自分たちで作る、自分たちのものなのだ。そして「民主主義」とは、そこに「ある」ものではなく、参加して「作っていくもの」なのだ、という事実を確認できるように思いました。

スライド18に戻りますが、世代に分けて問題を整理して7番目。一番下に、未来の（次世代）と書きました。未来の課題とは何なんだろうということも、時間軸と空間軸を分け整理する必要がある、と。

つまり、外部との協働関係、外からの助けを借りなければ、いくら島が充実していても、それだけで生活をつくっていくわけにはいかない。ということで外部から人が来てくれるというのは、どういうことか、についても想いを巡らしました。

5.島民の抱えている主な課題

「人口減少」に歴史をかけ、未来への夢を結ぶ総合計画策定においては、まず現在、島民が抱えている課題を抽出することが不可欠です。

ヒアリングやアンケート、ワーキングチームを通じて明らかになったさまざまなる課題を整理するにあたり、「人間が生まれてから死ぬまで、どの世代においても安心安全な暮らしができる島になることを難に、ライフステージを7つの段階に分けて、代表的なものを以下のように整理しました。」

1.「生まれる」世代の課題
・島で出産ができない
・産後産業のサポート体制が整っていない

2.「育つ」世代の課題
・子どもの遊び場がない
・未就学児をめぐるサポート体制が整っていない
・桃源郷など子どもの生活習慣が深刻化している

3.「学ぶ」世代の課題
・「遙かに学力」を買むための学習支援が不十分なため、基礎学力が底く貧乏気味になっている
・特別支援学級の受け入れ率が低く、また、社会的立場のための支援が充分に行なわれていない
・高校卒業後の進路と先端産業とのつながりがない

4.「働く」世代の課題
・子育てと仕事を両立できる雇用機会が少ない
・生計を立てる仕事がない
・求人求職情報など仕事関連情報が集約されていない

5.「暮らす」すべての世代の課題
・町の基础设施整備の不足(公的施設の老朽化、施設被災の増大など)
・ゴミの処理や下水道設備が悪い
・公共交通機関、乳児用・介護用のオムツ替えシートやベビーチェア等の恩口がない

6.「老いる」世代の課題
・介護サービスの体制が不十分なため、「島を出る選択」をされる方が多い
・元気な高齢者が活動する場が少ない

7.「次世代」の課題
・未満に引き取らべる自然環境を壊す一つある
・外年に馳せしもとも暮らしやすい安心安全の確保(食糧・エネルギーの自給)

これらの課題が、島に暮らしまを守る人々「島人(しまんじゅう)」の充実に関するものだとすれば、加えて、外の世界からの情報や考え方を運んでくる、そして島の情報を外に届けてくれる人々「島人(しまんじゅう)」の視点の必要性も、新たな課題として見えてきます。
そこで8つめの課題として次の課題があげられます。

8.「島に人を惹きつける」ための課題
・情報発信力が弱い
・島として資源や文化的な魅力が充分に発信されていない
・移住希望者に対応する恩口がない



Copyright © GAIA INITIATIVE 2007 All rights reserved

GAIA INITIATIVE

スライド18

久米島が抱える問題点

- 島で子どもを産めない
- 働き手がない 求人情報がバラバラ
- 子どもの遊び場がない
- 食糧、エネルギーの自給率が低い
- 島内での連携が弱いため島の力が出し切れない
- 子どもも大人も生活習慣病の割合が高すぎる
- 介護のサポート体制が弱いため、島を出ざるを得ない高齢者が増えている
- 移住・Uターン希望者に対応する恩口がない
- 子育てと仕事を両立しにくい
- ゴミのポイ捨て、不法投棄が多い
- 赤土の流出などで島の自然環境が悪化
- オムツ替えシート、スロープなど赤ちゃん・介護用の設備が足りない

これらの問題点を前に必要なのは、島民一人ひとりによるまちづくりです。

次のページから、その形を探っていきます。→

Copyright © GAIA INITIATIVE 2007 All rights reserved

GAIA INITIATIVE

スライド19

本来、久米島は
こんな力を
もっています。

食糧の自立、経済の自立、エネルギーの自立、文化・教育の自立
社会情勢が激変する今だからこそ、あえて基本に立ち戻る。
久米島のDNAに深く根ざした久米島らしい未来のために、
まずは「自分ごと」として動くこと。
そして、島人同士がつながり、さらに、外の知恵や力とつながる
その先に「夢つむぐ島」久米島が実現します。



Copyright © GAIA INITIATIVE 2007 All rights reserved

GAIA INITIATIVE

スライド20



離島でありながら水が豊か
多様な地質が密集し、地層がフィルターの役目を果たす久米島は、数多くの水源と良い水質に恵まれた島です。池塘や野菜やモヤシまでもがおいしいのですが、「水がいいから」です。また、海洋深層水を手に入れたらもう水不足にならぬであります。



自給自足できる農

島の名前に「米」の字がある通り、古くは豊かな米どころでした。かつて久米島は農業、漁業での自給自足を基に独立性を保っていました。



強大な国家と対等に渡り合ってきた
貿易の中繼地として周辺の強大な国家と対等に



琉球列島で最も美しいと

2010年のWWFジャパンの調査で、久米島南東岸のサンハナリと呼ばれる海城に日本最大のサンゴ群が確認されました。「サンゴの森」と、良い意味で罵られました久米島は、地形のおもしろさ、透明度、小さな島だからマンタやハンマーヘッドシャークといった大きな魚との遭遇率、ポイントまでの近さ、4の括子がそろっています。ダイビングからも楽しめます。



「ひとづくり」「ものづくり」が得意
久米島の人の気質のひとつとして、前例のないことへのチャレンジスピリットが高いことが挙げられます。近年では、海洋深層水で育てる「えび」と「海ぶどう」、風土を活かした「久米島黒薺」、久米島ならではのおもてなし「アーバルギー対応食」などが、久米島全体会を光らせています。「久米島黒薺」の後援者伝承など、伝統技術の継

GAIA INITIATIVE

久米島のDNA

Copyright © GAIA INITIATIVE 2000. All rights reserved.

スライド21

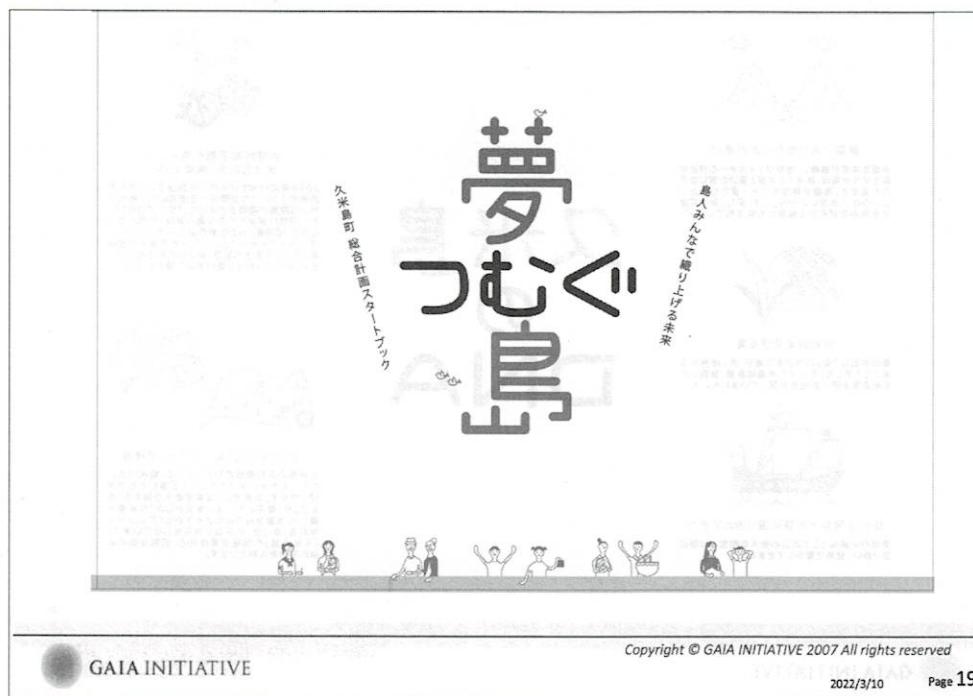
つまり湾や川を埋め立てて、自分たちや、魚のいのちを育むこともできないものに汚し、そんな風に破壊された島の自然の姿があつたら、それを、外部から見に来てくれるか？イヤ、そんな愚行は絶対やってはいけないことだ。一度破壊してしまったら、あ、ごめん、間違えた！と言って、お金をかけても、もう戻らないんだ、ということの確認になりました。

「夢つむぐ島」というタイトルの総合計画ができ、一人ひとりの島人が手にとって読み取り、参画できる読み物版も作成しました（スライド22）。10年先を見据えて「島人みんなで織り上げる未来」。久米島紬もありますから。笑。みんなで紡いでいくこうということを報告書にしました。もちろん、この体裁以外の役場むきのきちんとした大人っぽい報告書

も作成いたしましたよ。笑。

スライド21では、島の自然の懐の豊かさ、ラムサール条約。水が豊かだ。かつては米も自給自足していたんだよ。そして、万国津梁、国際関係の一番西の玄関ですので、琉球に上がる中国の軍団はここで身支度を調べ、琉球王朝から中国に行くときは、ここが最後だといって水とお米を積んでいく。だから、離島の閉鎖性に比べると久米島は排他しない歴史がありますね…。などなどのページも加えました。ここを読んで、あらためて、島ならではの、美しいもの、人づくり、ものづくり。久米仙も入ると思いますけど、素敵なかつら文化があるってことを再認識できました、という感想をくれた方もいました。

いま、たまたま「多様性」がブームになっている言葉ですが、そもそも私たちの存在そ



スライド22

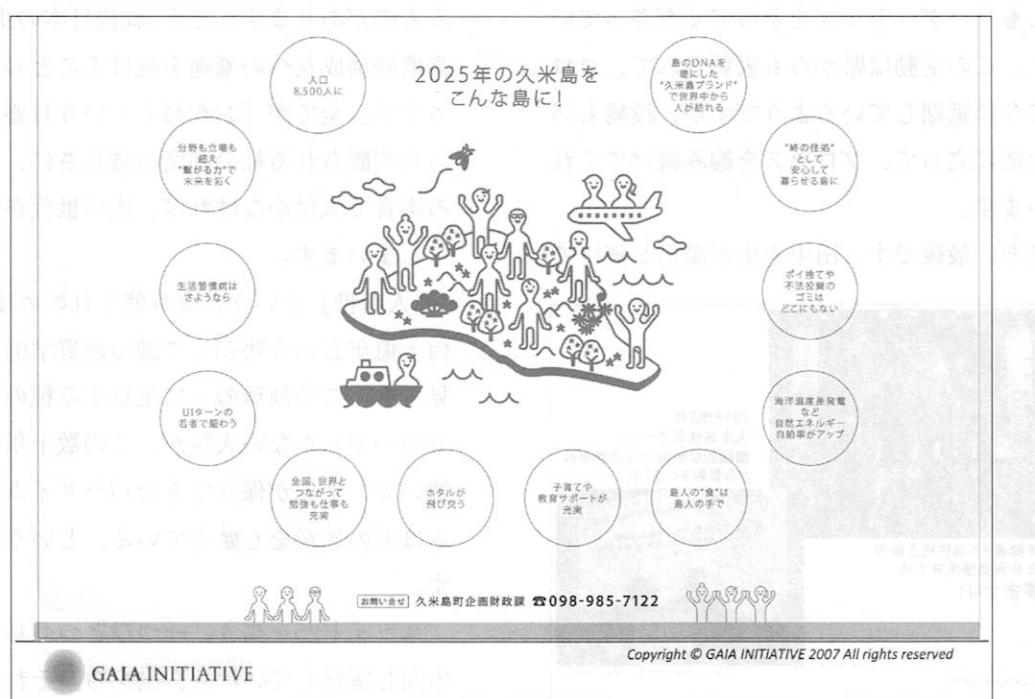
のものは、みんな違うわけで、自分と同じ人、など居ませんよね。ブームではなく、「多様性」というのは当たり前の状況を表現したまでのことで、全員違う。私たちの一人一人が、きょうだいでもそうであるように全員違うのです。だけど同じでないといけない、という、もの作りのトータル・クオリティー・コントロールの経済合理性と効率性が、社会制度設計にまでなっていた。それだけの話。だから、それではいかんでしょう、まずいなと気付き始めたから、漸く出てきた言葉なんだと思います。

離島しかり。一島一島、全く異なる存在なのですから。自分たちはこういう者だ。この島に来ないと見えないぞ、というそれぞれの誇りがなければ、小さな離島なんて、大きな

態度や、大きなお財布を持ってくる人、大きな声を出す人。それにやられてしまうんだということも、合わせてもう一回自覚しましょうねという学びの副産物もありました。

この総合計画作成のプロセスで、保育園児を連れて移住してくれた彼女は、すっかりたくさんのママ友や、役場の若者組み（もちろん重鎮の方々も、ですが）とも、たくさんのおジイやおバアとも、本音ベースのおつきあいをさせていただけるようになりました。

そして、スライド23。2025年。10年後、こんな島になれるんだ！ だけど、そんな島になるには私たち一人ひとりの努力ともう一つ、行政のシステム。これも変えていかないと駄目だから、頑張りましょうね、楽しく！ 島の人がどれだけねじりはしまきしても、やは



スライド23

り、政治と行政を、自分たちのものとして参画しチェックしていく努力なしには、すぐダメになってしまふんですよね、ということもシェアしておきたいことでした。

それで出来たのが「ドリー部チャレンジ」という島人の若者が中心になった活動グループです。もはや移住組、というより生糸久米島ニアンになった彼女も中心になって、総合計画の目標と、いまの自分たちの生活がどれくらい近づいているか？達成までは何が足りずに遠いのか？…などをチェックし、褒めたり励ましたり確認できる場としての「夢まつり」というイベントを1年に1回開催し始めました（スライド24）。夢＝ドリームする部活、だから「ドリー部」。何だかお洒落なのか、何なのか、よくわかりませんが、笑、「FMくめじま」の人気キャスターのマンデーさんもリーダーシップをとってくださっています。この活動は県からも表彰されて、コロナで今は延期しているようですが、役場も同じ土俵に立って、プロセスを編み続けてくれています。

さあ、最後です。田中先生が発信し続けて



スライド24

くださっている「森里海連環学」。森と里と海が繋がって、私たちのいのちや、日常生活が成り立っている。この姿は、島嶼地区では当たり前に認知できます。海と山がいてくれていて、私たち一人一人のいのちが、動物、植物含め、育まれ守られている。ここでは、その当たり前のことが見えるのです。

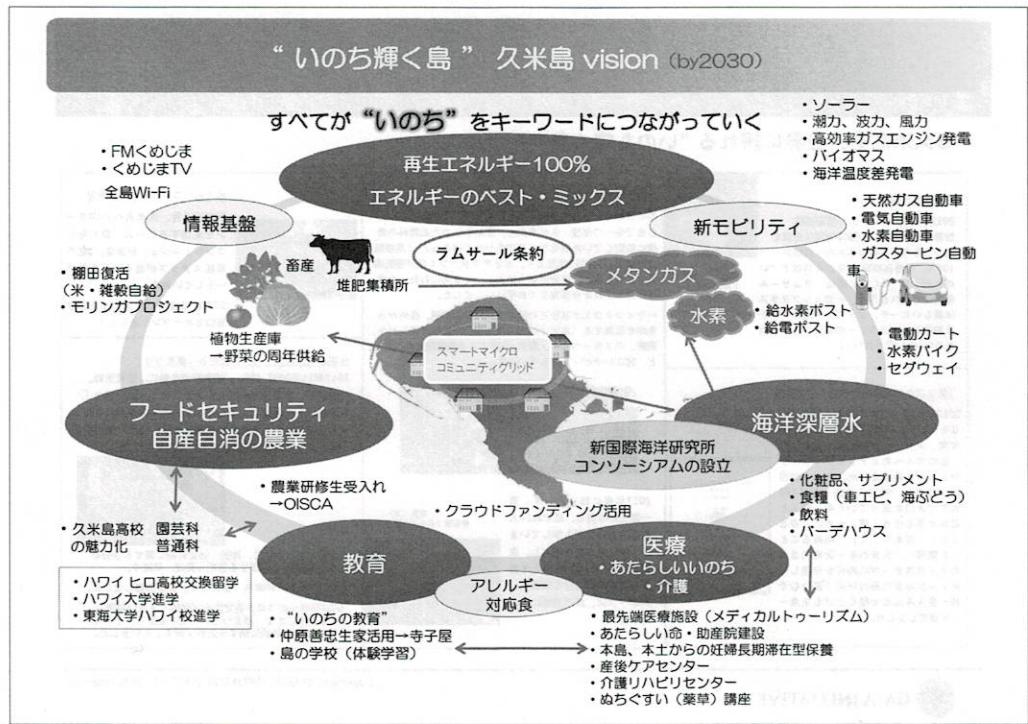
誤解を承知で平たく言えば、この当たり前を分断し、経済合理性、効率性の軸で駆進することだけが文明だ、幸せ追求だ、信じてきた成れの果てが、温暖化であり、資源の枯渇であり、止まらぬ環境破壊の都市化社会なのだと思います。

だから、平気な顔をして、ちっちゃな島から、新しい「いのちが輝く」生き方を創ってしまえばいいと思うのです。

島から日本の未来を見据えると、見えてくるものがあります。そう、戦後日本の生き方。高度経済成長への駆進を続けることの愚かしさです。全てが「おかね」という目盛りで測られ判断される社会制度の貧しさに、そろそろ本音で気付かなければ、次の世代が窒息してしまいます。

「人新世」という言葉も使われ始めました。何十億年という物差しで測る地質学的視座で見ても、この地球の上に生息する種の何千万分の一でしかない人類が、この数十年の振る舞いで、地球が保ってきたパラダイムを変えるほどの暴挙をし始めている、という事実です。

スライド25を描き、一つひとつの具体化を志向し実行していけば、出来る。それを久米島は教えてくれました。小さな一歩一歩です



スライド25

が、実現は現実を繋げていける（スライド26）。

今日は黒潮のお話がありました。豊かな魚たちのいのちを育んでくれる、その大きな「海洋」の営みすら、その温度、方向、深度…を変えてしまっている、という報告もあります。もはや、二酸化炭素の量を減らせば良い、地球の温度を下げれば良い、などという簡単な所作の問題ではないと、野中は思います。

最後に、この図をシェアさせてください。スライドの27です。

「私たちは一人ひとりいのちがある。この真ん中の赤いポツンです。で、家族の円があつて、島があつて、日本があつて、アジアがあつて、地球があつて…。別の次元では、同じように、属性ごとに、会社があつて、学校があつ

て、地域があつて、という、縦横にいろいろな関係性で繋がり、存在している訳です。そう、生きているという、その事実は、大きな外側の円の地球そのものと全部繋がっているのです。だから、ウクライナで起きていることというのは、実は、私たちの空気の中で、繋がっている出来事でもあるのです。これは抽象ではなく、すぐにでも、私たちの上に起きる、いえ、起きている出来事もある、と認識すべきだと思っています。

そう、具体的には、日本の中で私が一番危惧しているのは沖縄です。

沖縄が、このまま例えば辺野古の問題についても「まあね。なんくるないさ。投票したって、埋め立て反対といって70%が反対しても結局、本土の政府は埋めるんだから。だった

「+ 1 いのち輝く島」プロジェクト (2012年9月～現在)

●久米島を、世界に誇れる“いのち輝く島”へ！

パートナー協定

2012年9月、パートナー協定締結。
世界唯一（当時）の海洋温度差発電を
軸とした再生可能エネルギー自給率
100%、食糧自給率などを目指す“い
のち輝く島”づくりを開始。ラムサール
条約に守られた満流、世界トップクラス
の美しいビーチ、ウミガメの産卵…豊か
な自然とテクノロジーの融合で世界に誇
れる“いのち輝く島”へ！



写真（上）
平良町長（当時）
との顔合わせ

久米島高校魅力化プロジェクト

島の未来づくりには欠かせない人材育成。その要ともいえ
る島で唯一の高校、久米島高校。定員割れのため農科の危
機に直面していた園芸科の存続をかけて始まった「高校魅
力化事業」。2013年夏より、ガイアスタッフ1名が嘱託職
員として久米島町教育委員会に入り、4年間にわたり本事
業の立ち上げから運営までお手伝いしました。

ハワイコナエナ高教との短期交換留学の実現、島内から

生徒を募る「島留学制度」の実現、高校パンフレット

刷新、ポスターづくり、東京・大阪での学校説明会開催な
ど、幅広いサポートをしています。



写真（下）
学生寮「じんぶん館」

「第2次久米島町総合計画」策定支援

2013年11月より町の10か年計画づく
りをサポート。2014年1月～6月の半
年間、スタッフが久米島に移り住み
、島の方々へのヒアリングやワーク
ショップを重ねました。最大の課題
は人口減少、8000人の島で毎年100
人ずつ人口が減っていく中、島人と
自然が活き活きと輝くために「守る
こと」「変えること」「始めること
」を整理し、生まれる～次世代まで
のライフステージに施作を分類した
第2次久米島町総合計画「夢むぐ
島～島人みんなで織り上げる未来～」
を策定しました。



GAIA INITIATIVE

島ぐらしコンシェルジュ発足

2016年5月、久米島へのUIター
ンを支援するチーム「島ぐらし
コンシェルジュ」が発足。3名の
専任スタッフが島ぐらしをサ
ポートしています。

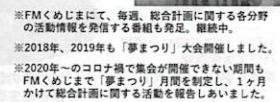


10月には古民家を活用した相談
窓口もオープンしました！



島民が総合計画を胸につながる「夢まつり」

2017年11月23日（祝）、総合計画を軸に、住民活動、
行政活動、議員活動を発表しあうことで、総合的な「
久米島力」を確認し、つながるための大会が開催され
ました！住民チームからの提案により、行政・議会も
一体となって島の未来を考える、初の試みです。



※FMくめじまにて、毎週、総合計画に関する各分野
の活動情報を発信する番組も充実。継続中。

※2018年、2019年も「夢まつり」大会を開催しました。

※2020年～のコロナ禍で集会が開催できない期間も
FMくめじまで「夢まつり」月間を制定し、1ヶ月
かけて総合計画に関する活動を報告してきました。

Copyright © GAIA INITIATIVE 2007 All rights reserved

スライド26

ら、現金を配ってくれる方がいいよ」。これ
を続けていけば、あしたはウクライナ、かも
しれません。これはちょっと過激過ぎますか。
笑。

この国のリーダーたちにも、すわ軍備拡張、
台湾有事だ、核装備だ、と考える方たちがいっ
ぱいいます。だから、私たちが、自分ごとと
して、日本の未来を、平和で、数多く殺した
ほうが勝つという、愚かなゲームでしかない
戦争などという愚行をしない国にしたい、と
強く思い、行動する必要があると思うのです。

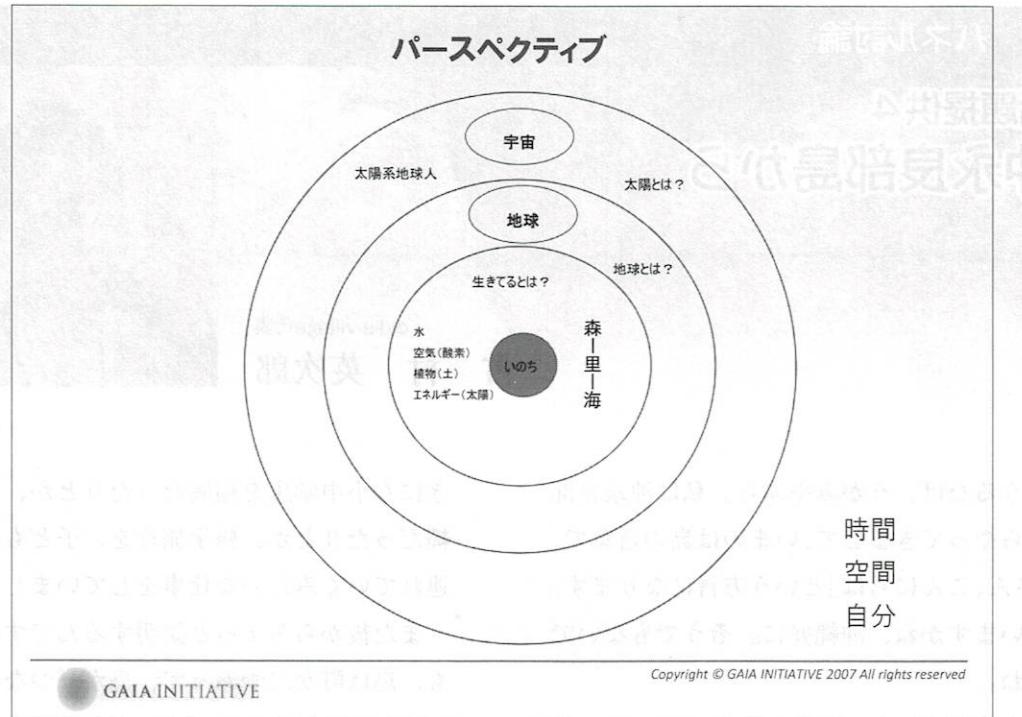
そのためにも、沖縄の人々が沖縄を変えて、
平気な顔して（ここが大事です、笑）幸せな
自立する島々を創ってしまう。それが、一番
手っ取り早く、素晴らしいモデルだと、野
中は信じてやみません。ですから、ぜひとも

皆さん、楽しく頑張って、沖縄から日本の未
来を変えてやってください。そのためにでき
ることは田中先生を始め、あれ、うなづいて
くださーい、できることは何でもします。

いのちが軸です。お金が軸ではありません。
あら、ごめんなさい。ものすごく長くなつて。
石田先生、後で肩をもみます。お許しくださ
い。

沖縄が変われば日本が変わる。この未来、
とってもとっても大事です。できることから
どんどん楽しく、カチャーシーを踊りながら、
そして泡盛を飲みながら、楽しいことは大事
です。声を上げていってください。心からの
お願いで私の話を終わります。

あつ、最後にご報告。くだんの移住を決めて
くれた彼女は、素敵なパートナーに巡り会



スライド27

い結婚。今では立派な久米島ニアンです。二番目に移住してくれた彼女は、本島宜野湾で、彼女も素敵な出逢いをいただいて幸せな沖縄ニアンを生きています。以上。ありがとうございました。

野中 ともよ（のなか ともよ）

NPOガイアイニシアティブ代表

NHK、テレビ東京等で、数々の番組キャスターを務め国際社会の動向を前線から伝えるジャーナリストとして活躍。アサヒビールなどの企業役員を歴任後、三洋電機会長を務め、“いのち”を軸にした環境負荷の低い商品こそがグローバルマーケットを制する鍵であるとし、卓越した経営手腕を示した。2007年NPO法人を立ち上げ、人間も地球という生命体GAIAの一員として振る舞うべきことを説く。

財政制度審議会、法制審議会、中央教育審議会、沖縄振興審議会委員、内閣構造改革特別区域推進本部教育評価委員長などを歴任。中部大学客員教授。ローマクラブ正会員。全国日本学士会「2018年度アカデミア賞社会部門」受賞。